令和２年度　東国文化自由研究レポート

研究テーマ

古墳時代に群馬県が栄えた理由
～馬に隠された秘密とは～

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校
1年4組19番　寺本　莉菜

1. 研究の動機・目的

古墳時代の群馬県は東日本随一の大国であり、先進国であったということを聞いた。だが、現在の群馬県は残念ながら東日本随一と言えるほどの県ではない。そのような群馬県がなぜ古墳時代に先進国だったのか疑問に思ったため、今回調査することとした。

2. 調査方法

①図書館(群馬県立図書館、伊勢崎市立図書館)
古墳時代の群馬県について関連した本を探し、調査する。
②群馬県立歴史博物館
現在行われている第101回企画展綿貫観音山古墳のすべてと常設展示を観覧し、古墳から発掘された出土品がどのようなものだったのか実際に観て調べる。
③綿貫観音山古墳
多くの貴重な品物が出土した綿貫観音山古墳を実際に訪れる。
④インターネット
本や博物館、現地調査で調べきれなかった内容についてはインターネットで調べる。

3. 調査結果

1)東国随一の大国で先進国であった古墳時代の群馬県

①東国の古墳王国

群馬県には古墳文化の象徴である大型前方後円墳が100を優に超えるほど存在しており、関東地方では群馬県が圧倒的な量を誇る。太田市の太田天神山古墳は墳丘長210メートルで東国最大の前方後円墳であり、畿内地方の有力古墳に多くみられる長持形石棺が用いられている。また、この太田天神山古墳はヤマト王権の応神陵古墳と同じ設計図でつくられていた。

これらのことから、当時の群馬県は政治と文化の中心であったヤマト王権と深い結びつきを持つ東国随一の国であったことが分かった。古墳の墳丘規模全長の1～27位は全て関西地方であるが、東国で一番大きい古墳は群馬県太田市にある太田天神山古墳である。古墳の大きさというのはその古墳に葬られている人物の権力、力の大きさを表す。東国一大きい古墳がある群馬県には東国一力を持っている人物がいたと考えることができる。

長持形石棺
太田天神山古墳

古墳の大きさランキング

順位	古墳名	墳丘規模全長(m)	所在地
1	仁徳天皇陵古墳	486	大阪府
2	応神天皇陵古墳	425	大阪府
3	履中天皇陵古墳	365	大阪府
4	造山古墳	350	岡山県
5	河内大塚山古墳	335	大阪府
6	五条野丸山古墳	310	奈良県
7	ニサンザイ古墳	300以上	大阪府
8	渋谷向山古墳	300	奈良県
9	仲姫命陵古墳	290	大阪府
10	作山古墳	286	岡山県
⋮			
28	太田天神山古墳	210	群馬県
⋮			
49	浅間山古墳	172	群馬県

②全国的にも貴重な品物を所有

綿貫観音山古墳で発掘された銅水瓶はヤマト王権の拠点だった畿内でもほとんど目にしないような先進的な金属器である。日本ではほぼ出土していないが、庫狄廻洛という6世紀後半の中国の貴族の墓からこの銅水瓶が出土していることから、綿貫観音山古墳で出土した銅水瓶は中国大陸でつくられたものである可能性が高いということである。

このような貴重な品物を手にしていた当時の群馬県は、中国大陸とも交流のあったグローバルな先進国であったことが考えられる。国内の政治と文化の中心であったヤマト王権だけでなく、当時の先進国であった中国との交流を持っていた群馬県は東国随一の地域であったと言えるだろう。

＊綿貫観音山古墳

古墳全体

石室

＊実際に綿貫観音山古墳に行ってみた。

綿貫観音山古墳は住宅街の中に位置している。私の想像では古墳というのは周りが何か柵のようなもので頑丈に囲まれており、入りにくいような感じだと思っていたが、想像よりも身近であり、親近感が沸いた。

＊綿貫観音山古墳から出土した銅水瓶

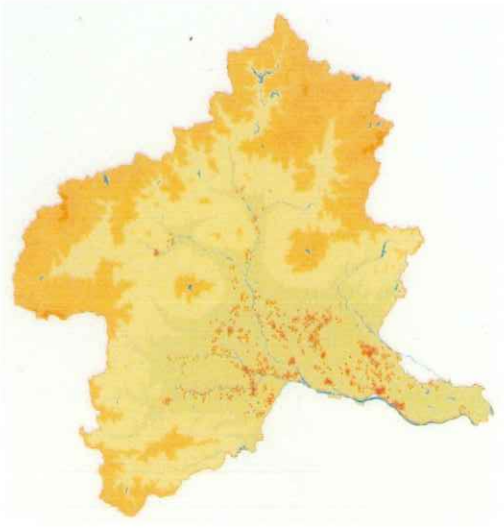
国内最古の銅水瓶で、古墳出土品で完全な形のものとしても、国内唯一の例。頸部・胴部などに整形のろくろ挽きによる線状の痕跡が残る。底の小孔は、制作時の回転による整形に必要な芯棒を通すためのもの。蓋の裏には落下防止用の銅板が取り付く。

銅水瓶

③埴輪大国群馬県

群馬県では多くの埴輪が出土している。群馬の埴輪出土地は1200基以上である。形象埴輪であるが、奈良県や大阪府でもそれぞれ650、900基出土している。これらの埴輪発祥の地よりも群馬県は埴輪の出土数が多い。また、国で初めて国宝に認定された埴輪は太田市で発掘された埴輪武装男子立像である。国の国宝・重要文化財に指定されている埴輪は全58点中、22点が群馬県から出土した埴輪である。

大型で優れた埴輪は、古墳に眠る王の生前の権威や財力を誇示するものである。この埴輪が全国的にも多く出土していたということは権威や財力を持った首長が当時存在していたということを表している。



群馬県内埴輪出土古墳分布図
● 埴輪出土古墳

国宝　武装男子立像

2)なぜ古墳時代に群馬県は栄えていたのか

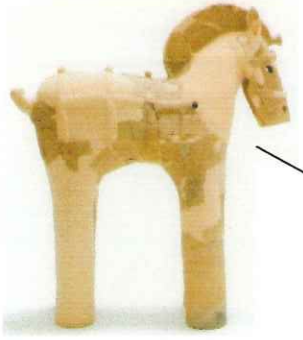
古墳時代の群馬県が先進国であったことが分かったが、なぜ栄えていたのか調べてみると、次の3つが大きな要因であることが分かった。

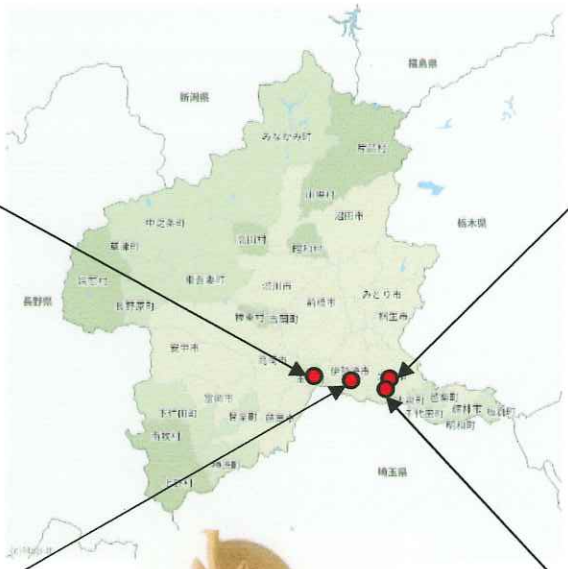
①肥沃な土壌と豊富な水を背景として農業が発展していた。
②利根川水系によって輸送路につながる交通の要衝であった。
関東、東北地方統治の拠点という政治的な意味をもっていた。
③当時貴重だった馬の存在。
当時の馬の存在というのは社会に欠かせない力の源泉、権力の象徴であった。
主に移動・輸送・農耕・土木作業に利用されており、現代における車のような存在。

群馬県には地名に馬という名前が入っているだけあって、群馬県には何らかの形で馬が関係しているのではないかと考えた。また古墳時代、朝鮮半島から入ってきて間もない馬は貴重であった。これらのことから上記3項目中、馬について群馬県に与えた影響を詳しく調べることとした。

3)現在に残る当時の馬に関する出土品

①馬が重要だったことを示す馬型埴輪が群馬県内で多く出土している。
群馬県では馬型埴輪が350例ほど出土しており、全国で第1位の数量である。この馬型埴輪は様々な種類があり、飾り馬、人の乗る馬、横すわりの馬、荷駄用の馬、裸馬などがある。埴輪というのはその時代に大切にしていたものを形に表す傾向にあった。
このことから古墳時代の群馬県は、馬の存在が大きく、大切にしていたことが考えられる。
馬型埴輪の出土数が全国で第一位ということから、全国の中でも突出して馬に力を注いでいたことが埴輪からも推測することができる。また、馬型埴輪には様々な種類がある。このようなことから、様々な場面で馬が必要とされていた、使われていたということが確認できる。


荷駄用の馬
玉村町　小泉長塚１号墳



飾り馬
太田市　オクマン山古墳

横すわりの馬
伊勢崎市　雷電神社跡古墳

裸馬
伝群馬県

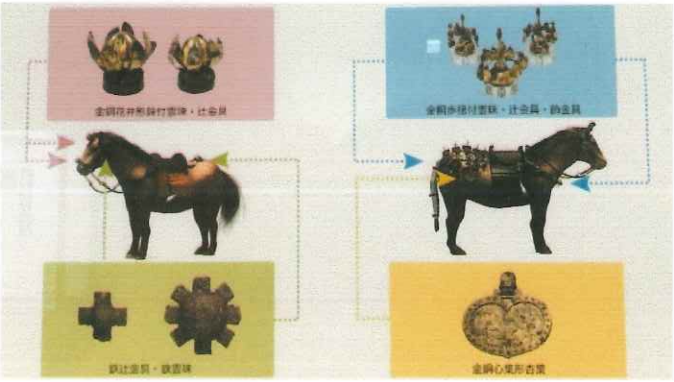
人の乗る馬
太田市　高林古墳群

②貴重な馬の装飾品が出土している。

首長レベルの古墳からは馬具の装飾品(杏葉・雲珠・辻金具・飾金具)が発見されている。また、高崎観音山古墳で出土された馬具は形式の異なる4種類の轡が出土されており、4頭分の馬具が埋葬されたと考えられている。しかも、4頭分の4形式で馬具類がそれぞれ副葬されていた。これらの形式の異なる馬具類の存在は単に多くの馬を所有していたという意味だけではなく、貴重な装飾品を馬に付けることが出来るほど富を得ていたと考えられるため、埋葬された人の高い地位や大きな権威を表していると考えられる。

また、馬を装飾する馬具は馬を着飾る、目立たせるためのものであった。馬を装飾するという行為自体が古墳時代、馬がとても重要な存在であったことを示していると考えられる。

装飾品の取り付け位置



金銅花弁形鈴付雲珠・辻金具
綿貫観音山古墳

金銅歩揺付飾金具
綿貫観音山古墳

鉄雲珠・鉄辻金具
綿貫観音山古墳

金銅心葉形杏葉
綿貫観音山古墳

ちなみにこの金属製の装飾品がどこで作られたものかというと、5世紀前半ごろまでは多くが輸入品、その後、日本国内で生産されたものが増えていった。

＊それぞれの装飾品の特徴

辻金具・・・革ベルトの交差部分に取り付ける。台座の脚が4本。

雲珠・・・馬のお尻の頂上に取り付ける。台座の脚が5本以上のもの。うずたかい金具を使うことが名前の由来。

飾金具・・・辻金具や雲珠よりも大きさは小ぶり。台座がない。

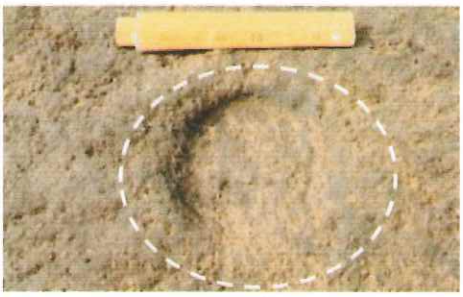
次に重要だった馬は古代の群馬県に多くいたのか、疑問に思ったため調べてみた。

4）古墳時代の群馬県ではどれくらいの馬がいたのか

榛名山麓を中心とした一帯では6世紀初頭の榛名山火山の火山灰・土石流に埋もれた水田跡が発見され、その水田から馬の蹄跡が多数見つかった。この蹄跡はバラバラな方向に向かっており、この中には仔馬と思われる小さな蹄跡も見つかっている。仔馬がいたということから、この場で生産していたことが分かる。また、この蹄跡は水田の畔に沿って見つかっていることから、農耕用に使用されていた馬がいたということが分かった。

古墳時代の群馬県では多くの馬や仔馬が存在していたことから、馬の生産が盛んであったことがわかる。また、馬を生産していただけでなく、群馬県が栄えた理由の一つとして考えられている農業などにも馬を利用していたのが、水田から馬の蹄跡が多数見つかっていることから推測できる。群馬県が栄えていたのは、馬のおかげで農業が発展していたということも関係していたのではないだろうか。

馬の蹄跡
白井北中道遺跡
・蹄の向きがバラバラであることがわかる



馬の蹄跡
吹屋犬子塚古墳

馬の蹄跡
白井北中道遺跡
・畠の畝の中に蹄跡が確認できる

踏み分け道
吹屋犬子塚古墳
・この道を人や馬が歩いていた

当時、馬の生産技術は最先端技術であったため、これだけ多くの馬を生産することは当時は相当難しいことであったのではないかと思う。そこで群馬県で多くの馬を生産することが可能になった理由を調べてみた。

5)群馬県が馬の一大生産拠点になれた理由

①馬の生産技術を持つ渡来人の影響

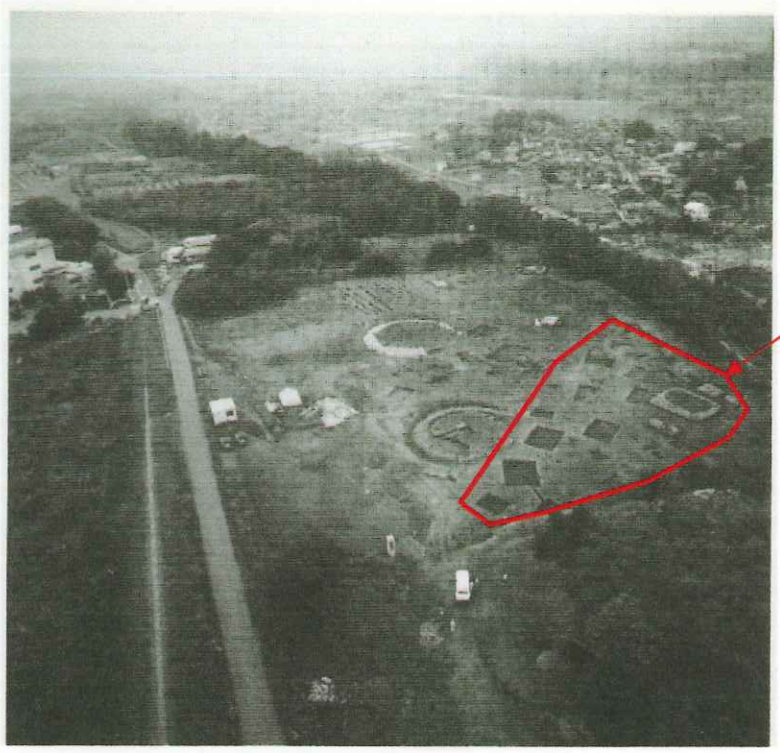
高崎市の剣崎長瀞西遺跡の南側にある平塚古墳を築くことになる首長がヤマト王権との交渉により、馬の生産技術を持つ朝鮮半島からの渡来人を招いた。この人々の技術により、群馬県での馬の生産が開始されることとなった。

＊馬の生産技術をもつ朝鮮からの渡来人が剣崎長瀞西遺跡に来たと思われる根拠

・剣崎長瀞西遺跡の東側に方墳、方形積石墓がみられるが、この方墳から朝鮮半島製と考えられる金製垂飾月耳飾と韓式系土器が見つかったこと。

・馬を埋葬した土壙が見つかり、またその馬には鉄製の環状鏡板付轡が装着されていたこと。

これらの朝鮮半島由来の品物が出土していることから渡来人がこの地で生活していたということが分かった。



剣崎長瀞西遺跡古墳群全景

鉄製轡

金製垂飾月耳飾

韓式系土器

朝鮮半島とヤマト王権が戦った際、朝鮮半島には馬がおりとても強かった。このようなことがあり、ヤマト王権は馬に目を付けた。そんな群馬県の首長がヤマト王権以外の地域よりもいち早く馬に目を付け、生産を始めた。

平塚古墳を築くことになる首長が、馬に目を付ける先見の明を持っていたことがほかの地域よりも馬の生産が盛んになった一つのきっかけなのではないかと考えられる。

②地形や地質などの風土が馬の生産に適していた。

古墳時代の群馬県では多くの馬が飼育されており、官牧が9カ所、また私牧は各地にあった。この官牧の中でも6カ所の場所は推定されている。

＊場所が推定されている官牧6カ所
㋐利刈牧　渋川市（旧子持村）
㋑有馬牧　渋川市有馬
㋒市代牧　中之条町
㋓大塩牧　みなかみ町（旧月夜野町）
㋔塩山牧　下仁田町
㋕新屋牧　甘楽町

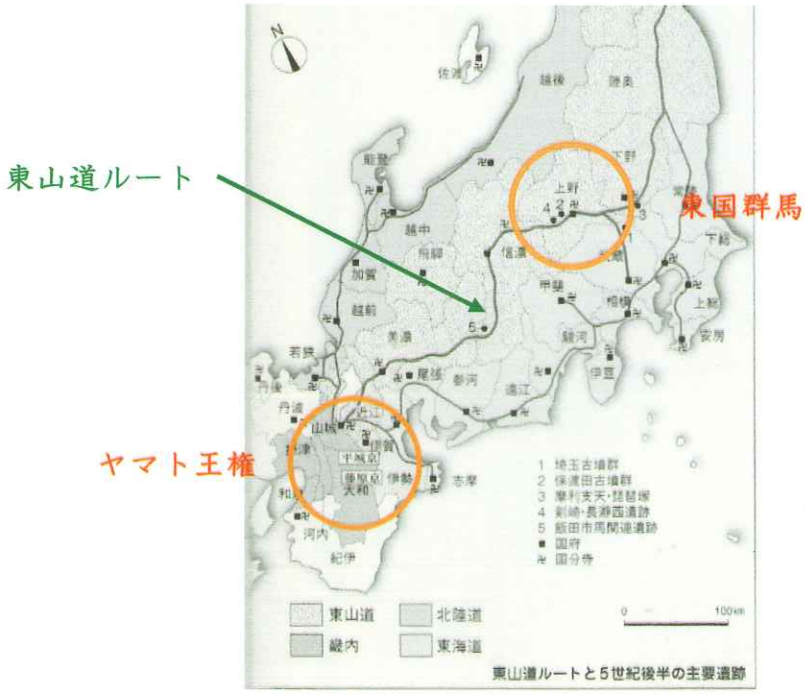
この6カ所の官牧であるが、右の地図から山の麓に作られていたことが分かる。山の麓は涼しく、馬はこのような涼しい場所を好むため、飼育しやすかったのではないだろうか。

また、馬の食料である牧草も山麓には多く生えていたと思われるため、馬の放牧地として適していたと考えられる。

③ヤマト王権と群馬は後の東山道で繋がっていた。

馬が登場する前はヤマト王権と東国を結ぶルートは、陸路と太平洋岸の航行により東京湾に行き、そこから利根川を遡ってきたとされている。だが馬が登場すると内陸の東山道ルートがヤマト王権と東国を結ぶルートとなった。そしてこのルートで生産した馬を、ヤマト王権に輸送することができるようになった。群馬で生産された馬は毎年、選び抜かれた50頭をヤマト王権へ貢納していた。

当時の政治と文化の中心地であったヤマト王権に重要な馬を群馬県が生産し、供給することによって、馬の生産地として大きく栄えることができたということが分かった。



4. 考察及びまとめ

群馬県は大型前方後円墳が全国的にも多く造られており、東国一大きな古墳も群馬県内に存在している。また、全国的にも珍しい銅水瓶を所持していた。そして、群馬県は埴輪大国であり、国宝や国の重要文化財に指定されている埴輪も多く存在している。これらのことからも分かるように、群馬県は他の地域にはないような技術力および経済力を持つ東日本随一、また全国でも屈指の先進国であった。

このような地域になれた理由として、馬が深く関係しているということが今回の調査で分かった。当時社会に欠かせない力の源泉、権力の象徴であった馬が群馬県に与えた影響は、大きなものだった。貴重な馬を飼育する技術を持っていたこと、また政治や文化の中心であったヤマト王権に、これだけの価値があった馬を一大生産地として毎年送っていたことにより東日本随一の先進国になることが出来たのであった。

このほかにも、今回調べたことを通して、他にも群馬県が先進国になれた理由を考えてみた。それは群馬県の豪族・首長がこれからの世の中に何が必要となるかを見極める先見の明を持っていた、またその着目したことを具体的に実行に移す行動力があったからではないだろうかということだ。自分達が発展するために何が必要なのか的確に判断する力がなければ、東日本随一の先進国にはなれなかっただろう。また、着目することが出来たとしてもそのことを具体的に実行するためには多くの人々の協力も必要だ。群馬県が先進国になれた理由には、群馬県にいたリーダー達が的確な判断力、そして行動力を持っていたこと、またリーダーの考えを理解し、目指すべき目標に向かって協力し合う人々がいたこと、これら古代の群馬県人の持っていた力が大きく影響していたのではないかと考える。

先見の明を持っていること、行動力があること、皆で協力し合うことは昔だけではなく、現代でもとても大切なことである。今回の東国文化研究を通じて、古墳時代の群馬県の人々から、これから生きていく上で重要なことを学ぶことが出来た。

5. 参考文献

・東国文化副読本
・列島の考古学　古墳時代　　右島和夫、千賀久/著　　河出書房新社
・東国古墳時代埴輪生産組織の研究　　日高慎/著　　雄山閣
・国宝武人ハニワ、群馬へ帰る！これが最後、東と西の埴輪大集合　　群馬県立歴史博物館編
・古代東国のフロンティア・上毛野(カミツケノ)　　小池浩平/著　　みやま文庫
・群馬の歴史と文化　上州文化の源流をたずねて　　近藤義雄/監修　　みやま文庫
・東アジアに翔る上毛野の首長・綿貫観音山古墳　　大塚初重、梅澤重昭/著　　新泉社
・高崎市HP　剣崎長瀞西遺跡出土品　http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2013121800693/